

二十一 華文字

私は兄と二人で京都に住み、妹は東京で姉のところに行ったのです。ところが妹が病気で入院したのです。ひとり入院してさびしいだろうし、早く病気が良くなるようにと思い、毎日々々、見舞のはがきを出すことにしたのです。それも一枚々々、表書きの書体を変えて出すことにしたのです。第一便は昭和三年四月四日でした。それから毎日々々、表書きの書体を変えて出すのですが、一か月もすると行きづまってしまふかと思つたのですがそうではなく、いろいろな模様が次々出来て無限に続くのです。これを始めてから六十日ばかりすると妹の誕生日、六月二日が来るのです。その時は百枚目をだす。それから七十日ばかりすると私の誕生日、八月十二日が来るのですが、その時は二百枚目を出すという約束をするのです。そうすると一日一枚では足らなくなるのです。忙しいものですからなかなか思うように書けないのです。とうとう約束の二百枚目を書く時は徹夜して書くのです。そのころ京都から手紙をいつ出せば東京にいつ着くということが大体決まっていますので、それでせつぱつまって徹夜して書くのです。百九十九枚目、二百枚目・・・約束の二百枚目を書き終わったのが八月十日の夜中、二時半で、書き終わってからこれをポストに入れて行くと書いておくのです。そうするとそれが十二日の誕生日の第一便に配達されるのです。夕方着いては感激が薄いのです。目がさめて第一便に約束の二百枚目が着くのです。そうすると妹が「兄さん